

ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト

赤松林太郎

♪ 14

オーストリア・
ザルツブルク

ワインから電車に揺られてザルツブルクに向かうと、少しづつ太陽が近くなってくるのを感じる。さらに南西に進むとチロル州に入り、インスブルックに至る。ここまで来ると、私たちはアルプスに抱かれ、太陽の申し子となる。ザルツブルクを最後に訪れたのは2019年夏。最後に見た、ヨーロッパの夏の太陽ということになる。ザルツブルクの夏はなんと1ヶ月半にわたり街全体が音楽で満たされる。伝統と格式のある音楽祭なので、夜のコンサートではドレスコードを守りたい。ところが山の天気なので、不意の夕立で、凍えるほど気温が下がることもしばしば。びしょぬれの衣装を拭きながら、運がなかつたのだと軽く失望するが、いつたん劇場に入れば音が光の粒となつて、私たちに美しい魔法の世界を見てくれる。

ザルツブルクはいわずと知れたオルフ・ガング・アマデウス・モーツアルトの生誕地。そして高名

モーツアルトに思いはせ



上 ホーエンザルツブルク城からの眺望
下 モーツアルテウム大学
近くのミラベル庭園
○ オーストリア・ザルツブルク(赤松林太郎さん提供)



あかまつ・りんたろう 1978年、大分県生まれ。2歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。洗足学園音楽大客員教授、大阪音楽大特任准教授。神戸市在住。

定です。
◇次回は3月14日に掲載する予

例えばモーツアルトは、ザルツブルクからワインに羽ばたいた。ベートーベンもフランス革命の飛び火をくぐり抜け、ワインに向かつた。今こそ、おののが羽ばたくために翼を見つける時なのだろう。

モーツアルトは、ザルツブルクからワインに羽ばたいた。ベートーベンもフランス革命の飛び火をくぐり抜け、ワインに向かつた。今こそ、おののが羽ばたくために翼を見つける時なのだろう。

な音楽家の父による英才教育のもと、モーツアルトは少年時代からヨーロッパ中を旅した。時にアルプスを越え、時にドーバー海峡を渡った。

ザルツブルクの名所のひとつにホーエンザルツブルク城がある。旧市街に切り立つように立ち、モ

ルツアハ川はまもなくドナウの支流であるイン川に流れ込み、ドイツでドナウ本流と合流して、はる

ーツアルトが生まれるずっと以前から、要塞として街を守ってきた。川が思い描かせる壮大なドラマに比べると、この小高い丘から見える色あせて感じられたのかもしれない。長らく大司教が絶対的な権力を持っていた閉鎖的な空間で、モーツアルトが収まるわけがすぎない。ザルツブルクはほんの箱庭に

音楽祭でモーツアルトを聴き、自由の翼を持ちながらも鳥籠の中で思うように羽ばたけないでいた彼の才能を感じると、コロナ禍の閉塞感に苦しんでいる日本人の若者たちを重ねてしまい、少しでも早い収束を願うばかりである。

この2年間で社会全体が変化したように、日本の音楽業界も大きく変化した。その変化を追い風にした新しい才能が出現した一方、クラシック音楽のふるさとでもあるヨーロッパに心を寄せて、作曲家や作品にじっくり向かい合うのを信条とする演奏家も多い。クラシック音楽はエンターティナーである一方、学問としての色合いを大きく持つ。コロナ禍でそのバランスを取るのがますます難しくなってきた。

